

小1プロブレム  
～新しい世代の教育問題～

日西 順子  
No. 301044

研究調査法 Hクラス  
丸本郁子先生  
2003. 10. 13

(表紙サンプル)

小1プロブレム  
～新しい世代の教育問題～

命題：小学校低学年に学級崩壊が起こり始めた原因は、少子化による子育ての変化と子どもの多様化に対応しきれずに、従来どおりにとどまっている学校教育にあると思われる。その対応策として地域での子育て支援や就学前教育との連携がとられている。

I. 序論

- A. 何を知りたいか
- B. 範囲
- C. 調査方法
- D. 命題

II. 学級崩壊の現状

- A. 学級崩壊の定義
- B. 低学年での学級崩壊の特徴
  - 1. 基本的生活習慣の欠如
  - 2. コミュニケーション不足・自己中心的
  - 3. パニック症状
  - 4. よい子ストレス

III. 子育ての変化

- A. 未熟な親たち
  - 1. 親中心の子育て
  - 2. しつけのできない親
- B. 子育ての孤立化
- C. 親子関係の変化
  - 1. 小児化時代の親子
  - 2. コミュニケーション・スキンシップ不足

IV. 小学校教育の難しさ

- A. 子どもの多様化

1. マスメディアの影響
  2. 幼稚園・保育所の自由保育
- B. 就学前保育との「段差」
- C. 小学校システムの課題

V. 地域での取り組み

- A. 親へのサポート
1. 子育て支援グループ
  2. 幼稚園・保育園の働きかけ
- B. 小学校の取り組み
1. 幼稚園・保育所と小学校の情報交換や交流
  2. 学校教育への保護者の参加
  3. 担任制や授業の工夫

VI. 結論

引用文献目録

(アウトライン・サンプル)

## 小1プロブレム ～新しい世代の教育問題～

### I. 序論

近年、小学校低学年特に1年生における学級崩壊がかつてない事態として報告されている。キレやすい10代が社会問題となって久しいが、こんな幼い頃から問題を持つ子どもが増えているということは、私たちにとって非常に心配なことである。教師たちは学級としてのまとまりが作れず苦勞しており、また親たちも我が子の育て方に問題を抱えているようだ。小学校低学年に学級崩壊が起り始めた原因は、少子化による子育ての変化と子どもの多様化に対応しきれずに、従来どおりにとどまっている学校教育にあると思われる。その対応策として地域での子育て支援や就学前教育との連携がとられている。この論文では、学級崩壊を引き起こしている低学年の子どもに視点を当て、現代の子どもの置かれている家庭環境や心理状態、親の子育ての変化、そして学校現場の問題点を調査してみた。その上で、学級崩壊を防ぐにはどうすればいいのか、これからの時代の子育てはどのようにあるべきなのかを考えてみたい。調査は主に図書、雑誌の記事によった。

### II. 学級崩壊の現状

学級崩壊が世間の話題となって久しいが、学級崩壊とはどのような状態を指すのだろうか。文部科学省は学級崩壊を「学級がうまく機能しない状況」であるとし、具体的には「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち至っている場合」を指すと説明する（徳武 78）。従来、学級崩壊というと、思春期に差し掛かった高学年の児童が担任の教師に反抗的になることで起こる場合が多かった。しかし最近では、小学校に上がったばかりの一年生の学級が崩壊している。さらに学級崩壊の約3割は指導力のある教師でも対応が困難だという（徳武 78）。そこで次に、低学年における学級崩壊の状態について述べていきたい。

低学年の子どもたちに特徴的なのが基本的生活習慣の欠如である。例えば、持ち物の管理ができず落としてもそのままだったり、また学校に遅刻してきたり朝ご飯を食べてこない子どもが増えたという。次に、自己中心的な子どもが多く集団行動ができない。入学式で並べない、じっとしてられない子どもが増えたのは顕著な例である。また、コミュニケーション能力が不足しておりすぐにけんかを起こす。次に最近の学級崩壊の原因として特徴的なのが、「パニック症状（尾崎 44）」である。これは、学校生活や学習中にちょっとした失敗や気に入らないことがあるとパニック状態となり手がつけられなくなることである。これに関連して、自分の苦手なことはやりたがらない、できないことはすぐ投げ出す子どもが多くなっている。汐見は、学級崩壊の引き金となっている子どもたちの特徴として、・・・

(本文サンプル)